Japan Association for the Study of School Music Educaitonal PracticeJapan Association for the Study of School Music Educai

障害児教育において音楽はどのような意味をもつか－中・高等部－

齋藤一雄（埼玉大学教育学部附属養護学校）

一昨年度は、音楽教育の目的を人間形成におき、音楽そのものの指導と音楽活動の特性を活用した指導の両面をおさえ、音楽教育によって総合的に子どもの発達を促していく大切さを討議した。

昨年度は、音楽活動を通して子どもの表現の壁を取り払うことができ、コミュニケーションや人間関係、そして表現する力が自然と高まることが確認できた。さらに、一人ひとりの目標が明確になり、それぞれの出番を作り出すことができ、お互いによいところを認め合い、みんなのものにすることによって、人間形成としての音楽のもつ意味が深まっていくのではないかと話し合った。

今年度は、２つの養護学校での実践を通して、約30人の参加者がテーブルを囲んで話し合った。

1　一人ひとりの発達水準に即した適切な課題や指導内容・方法はどう見いだしていけばよいか

（千葉県・今井久代）

年度始め、生徒の生活全般と音楽での実態をとらえ、音楽の指導内容・方法を検討した（宇佐川の発達診断、指導内容表、チェックリスト）。

音楽には、集団参加を促し、共感し合える素晴らしい力をもっているが、同一空間で鳴っている音楽刺激は、生徒個々にとって必ずしも全部が望ましい刺激とはいえない。そのため、中学部の音楽活動は、16名全員を対象としたり、３グループに分けて指導したり、個別の課題学習の中で展開したりした。個別の音楽療法を中心とした時間も必要な生徒もいるし、小グループに分けることによって、生徒の実態をより的確につかみ、課題を明確にした指導計画を立てることができる。

そして、教師と生徒が共に音楽を楽しみ、共感し、夢中になることによって、音楽が意味あるものになると考える。

2　音楽の特性を活用して生徒の発達課題に迫る

（山梨県・長田佳美）

知的障害と肢体不自由の重複障害児を対象に、ミオクロニー発作を持つＡさんとの国語の個別指導において、楽器でＡさんの興味を誘い、物と名まえと絵カードのマッチングを可能にしたり、探索行動を引き出したりした。脳性マヒのＢさんとの国語の個別指導では、歌を歌いながら点と点を線で結ぶ学習を成立させ、音楽が運動を引き出し、調整できるようにもしていた。

また、ＡさんＢさんＣさんを対象とした音楽の授業では、認知的な発達を考慮しつつ、あいさつ、歌唱、楽器と身体表現、鑑賞などを構造的に整理して行った。その結果、Ａさん他の精神的安定と活動を引き出し、楽器を操作する目と手の調整が可能となり、音源への注目や積極的な反応が見られるようになった。

3　討議

２つの実践は、大集団よりも小集団の中で、生徒の実態を見とり、生徒の活動と教師集団の指導について整理したものであった。

実践現場では、個々の生徒のニーズに応えようと取り組んでいるが、大きな集団で行っている場合が多く、それでは生徒一人ひとりにとって意味ある音楽活動が展開できないのではないか。また、生徒一人ひとりが受けとめる音楽に質的な違いがあり、小グループでの実践や一人ひとりを見とり一人ひとりに応じる必要を教師が勇気をもってまわりに働きかけ、作り出すことが重要である。

さらに、教師は絶えず生徒から学ぶ姿勢をもち、生徒にそった音楽活動を展開し、生徒の変容を見とっていくことが大切である。

音楽の授業はこうだ、音楽活動はこうでなくてはならないと固定的に考えず、もっと自由に教師自身も豊かな発想をもって取り組むことが、障害児教育において音楽のもつ意味を深めていくのではないだろうか。

NII-Electronic Library Service